

論文の概要及び審査結果の要旨

氏名	永井 久美子
学位の種類	博士(教育学)
学位記番号	第 30 号
学位授与の要件	大阪総合保育大学学位規程第13条
学位授与の日付	令和 6年 3月 17日
学位論文題目	園内組織における連携・協働体制の構築に関する研究 ー乳児保育担当者間のソーシャル・キャピタルに着目してー
論文審査委員	主査 瀧川 光治(大阪総合保育大学教授・博士(教育学)) 副査 渡辺 俊太郎(大阪総合保育大学教授・博士(心理学)) 副査 香曾我部 琢(宮城教育大学教授・博士(教育学))

〔1〕 論文の概要

本研究は、園内における円滑な連携体制・協働体制を構築するために、どのような園内組織体制が求められるかについて、ソーシャル・キャピタル理論を用いて検討した点で有益な研究と言える。近接領域における他分野ではソーシャル・キャピタル理論を踏まえて検討がなされているが、保育現場での援用はほぼ皆無である。保育現場における具体的な連携が円滑に進めるためには、まずはそこに関与する人たちの間で「情報共有」や「情報伝達の流れ」が重要であり、それとともに「役割分担」や「ルール」が明確であることが求められる。また、乳児保育クラスにおいては、ともに保育を進めていくためには価値観の共有や、互いに信頼しあったり、助け合ったりすることが求められることを踏まえて密な具体的連携が求められる。そのため、園内における円滑な連携体制・協働体制を構築するためにはソーシャル・キャピタルの醸成を意図した園内組織体制づくりが求められる。「ソーシャル・キャピタル」は、社会学や組織論の分野で「社会関係資本」と呼ばれるように、そこに関与する人々の関係性やつながりなどのネットワーク構築が基盤にあるが、ソーシャル・キャピタルの醸成においては「人々の協調行動を活発にする」ことが必要であることが示されている。そこで、本研究では3歳未満児クラス（いわゆる乳児クラスと言われる0歳児クラス、1歳児クラス、2歳児クラス）の保育者間の協調行動にはどのようなものがあるのかということを具体的にインタビューにより明らかにした点は、大変有益な知見であると考えられる。

このように、本研究で明らかになった知見や提案されている事柄は、乳児保育担当者間の連携・協働を円滑に進めていくための実践上の課題解消に資するもので有益である。

本論文の構成は以下の6章からなる。

はじめに

第1章 本研究の背景と目的

第2章 理論的枠組み—「連携・協働」を支えるソーシャル・キャピタル—

第3章 教科目「乳児保育I」のテキスト類にみる保育者間の「連携・協働」に関する分析的研究

第4章 保育者間の「連携・協働」を支えるソーシャル・キャピタルのあり方

第5章 乳児保育担当者間の「連携・協働」を支えるソーシャル・キャピタル

第6章 全体的な考察

引用・参考文献

以下に本論文の概要について述べる。

本研究では、乳児保育クラスに焦点を当て、園内組織や乳児保育担当者間のソーシャル・キャピタルの醸成に着目して、円滑な＜連携体制＞及び＜協働体制＞を構築するためにどのような園内の組織文化や組織体制が必要であることを明らかにすることが目的としている。本研究の主要な問いは3つである。第1に「乳児保育担当者間の具体的な連携を支える構造的ソーシャル・キャピタルや認知的ソーシャル・キャピタルはどのように相互補完的に絡み合うものなのか」、第2に「園内組織や乳児保育担当者間で、円滑な＜連携体制＞＜協働の体制＞づくりのための構造的ソーシャル・キャピタル及び認知的ソーシャル・キャピタルはどのようなことによって醸成されるのか」、第3に「コミュニケーション（対話・語り合い）が豊かに生まれる園内組織や乳児保育クラス内になっていくためには、どのようにソーシャル・キャピタルを醸成していくとよいか」といった点である。

各章のまとめは、以下の通りである。

第1章は、「本研究の背景と目的」として、乳児保育クラスにおける「連携・協働」の重要性とともに、上記のように本研究の目的を示し、吉池・栄（2009）を参照して、本研究の「連携」「協働」の定義を述べた。それを踏まえて、園内（クラス内）で、日常的に行われる具体的な連携のためには、それを支える＜連携体制＞や＜協働体制＞、仕組みづくりの必要性を示している。

第2章は、「連携・協働」を支えるソーシャル・キャピタルについての理論的枠組みを整理した。園内組織における保育者間の「連携・協働」のためには、コミュニケーションを基盤とした情報共有を円滑に進めていくことが、構造的ソーシャル・キャピタルを醸成するとともに、保育観の共有や保育の進め方などの共通理解を図るためのコミュニケーションを円滑に図ることによって、認知的ソーシャル・キャピタルが醸成されていく。さらに、乳児保育担当者間の場合は、まずコミュニケーションを基盤とした情報共有を円滑に進めていくことで、構造的ソーシャル・キャピタルを醸成していく必要がある。そして、保育観の共有や保育の進め方のみならず、一日の中でも変化する子どもの様子やその日の保育の状況

などについても共通理解しながら、柔軟な保育を行うためのコミュニケーションを円滑に図ることによって、認知的ソーシャル・キャピタルが醸成されていくことを明らかにしている。これらを理論的枠組みとして、第3章以降の分析に用いている。

第3章は、教科目「乳児保育Ⅰ」のテキスト類において、園内組織における「連携・協働」がどのように取り扱われているかについて、本研究の主要な3つの問いの視点から分析を行った。まず、構造的ソーシャル・キャピタルとして、情報共有や情報の流れなどにかかわる役割、規律などを明確にしておく必要がある。次に、日ごろからの目の前の子どもの様子や、その日の生活の流れで臨機応変に対応すること、互いに声を掛け合い、対話しながら、情報共有が基本となるコミュニケーションが大切になる。そのことにより、構造的ソーシャル・キャピタルが醸成される。また、明確で細やかな役割分担、クラス内での複数の保育者間で、生活の流れ・援助の流れを含めたルールや情報の共有をすることによって、保育の流れを円滑にするための＜連携体制＞のための構造的ソーシャル・キャピタルの醸成につながることを明らかにした。さらに、保育観を共有し、より豊かな協働のためには、日ごろからの良好なコミュニケーションによる、子どもに関する対話や語り合いだけでなく、保育や子ども、発達についての考え方や捉え方を相互理解していく機会や場が必要である。また、互いに思いや考えを率直に伝え合う対等な関係や互いに尊重し合う関係が土台となり、対話やカンファレンスをとおして互いの価値や信条などを出し合うことが必要である。さらに、乳児保育にかかわる保育者間の「チームプレイ」を成り立たせるような日ごろのコミュニケーションを土台に、声を掛け合い、信頼し合う機会や場が必要である。そうすることにより、認知的ソーシャル・キャピタルが醸成されることが明らかにしている。

第4章は、乳児保育担当者間の「連携・協働」を支えるソーシャル・キャピタルを明らかにするために、乳児保育担当者間のコミュニケーションに焦点を当てた先行研究の分析を行った。まず、保育者間で知恵を出し合って、よりよい乳児保育をめざして協働することが、認知的ソーシャル・キャピタルの醸成が協働の土台となることが明らかになった。次に、園内で、日ごろから、相談したり、意見を出し合い、話し合うことにより、互いの信頼や互酬性の規範といった認知的ソーシャル・キャピタルの醸成が図られ、保育者間の職員関係が柔軟になるとともに、チームとしての意識が生まれる。そのことにより、結束型ソーシャル・キャピタルが醸成され、構造的ソーシャル・キャピタルも相互補完的に醸成されていく。そして、「乳児保育担当者間」では、複数の保育者でチームとして保育を進めていく必要があり、乳児保育担当者間で信頼や互酬性の規範を高め、ネットワーク（グループ間の絆）を構築することにより、結束型ソーシャル・キャピタルが醸成されることがわかった。これらを踏まえると、「対等な関係や尊重し合う関係」「同僚性やエンパワメント」「対話的な組織文化の構築」とソーシャル・キャピタルの醸成の関係性を明らかにしている。

第5章は、保育者間の「連携・協働」を支えるソーシャル・キャピタルについてインタビュー調査を実施し、分析を行っている。その結果、協調行動の重要性が浮き彫りになった。連携を支える構造的ソーシャル・キャピタルの醸成のために、情報共有や情報交換を頻繁に

行う協調行動を出発点とし、さらに保育中や合間の時間に、子ども理解の新しい発見を肯定的に伝え合うなどの瞬間的な情報共有をするといった協調行動を行うことによって、連携を支える認知的ソーシャル・キャピタルの醸成につながる。そして、このような連携を支えるソーシャル・キャピタルを基盤として、協働を支える構造的ソーシャル・キャピタルの醸成のためには、同僚保育者の行動を把握した上で援助するといった協調行動を取ったり、頻繁なコミュニケーションを取りながら、相互に相談し合うなどの協調行動によって、協働を支える認知的ソーシャル・キャピタルが醸成されていくことを明らかにしている。

終章（総合的考察）では、第1に、乳児保育担当者間でクラス全体の動きの状況を共通理解したり、個々の子どもの情報の把握と共有していくための構造的ソーシャル・キャピタルの醸成として、保育中や合間の時間を活用するなどの仕組みが必要であり、そのような構造的ソーシャル・キャピタルを基盤として、子どものことを肯定的に語るといった協調行動を行うことによって、認知的ソーシャル・キャピタルが醸成されることを明らかにしている。第2に、相談したり、意見を出し合ったり、話し合うような連携を図っていくことだけでなく、構造的ソーシャル・キャピタルとしてのネットワークづくりと、それに付随するルールなどの規律や役割を明確にしておく必要があり、そのような構造的ソーシャル・キャピタルを基盤として、子どもに対する共通した対応を意図して、頻繁なコミュニケーションといった協調行動を行うようにしていくと、認知的ソーシャル・キャピタルが醸成されることが明らかにしている。第3に、日ごろのコミュニケーションを土台に、連携にかかわる声を掛け合うといった協調行動を行い、信頼し合う機会や場を設けることによって、認知的ソーシャル・キャピタルが醸成されていき、結束型ソーシャル・キャピタルが醸成されることが明らかにしている。

以上を踏まえると、園内組織における連携・協働を支えるソーシャル・キャピタルの醸成は、連携・協働体制を支える協調行動によって左右されることを明らかにしている。このことは、乳児保育において、複数担任制でかつ主担当と副担当が週替わり・月替わりで保育を行う場合が多い現状を踏まえると、日常的に連携・協働体制を支える協調行動がより重要であることを意味している。

〔2〕 審査結果の要旨

本学大学院児童保育研究科学位（課程博士）審査規則は第12条において次の五つの審査基準を公表している。

- (1) 当該博士学位申請論文が、当該申請者の研究業績を踏まえ、その集大成として認められる内容であること
- (2) 当該博士学位申請論文の属する研究領域において、独創性が認められること
- (3) 当該博士学位申請論文の属する研究領域において、その水準の引き上げに資するものであると認められること

- (4)当該博士学位申請論文に、他の領域を含む学際性が認められること
- (5)本学大学院が授与する博士の学位にふさわしいと認められるものであること

もとより、博士学位申請論文が五つすべての審査基準を満たしていなければならないわけではないが、本論文がこれらの審査基準にどの程度適合しているか、順次検討を加えて行きたい。

(1)当該博士学位申請論文が、当該申請者の研究業績を踏まえ、その集大成として認められる内容であることについて

本論文の第1章(本研究の背景と目的)、第2章(理論的枠組み―「連携・協働」を支えるソーシャル・キャピタル―)、第5章(乳児保育担当者間の「連携・協働」を支えるソーシャル・キャピタル)、第6章(全体的な考察)は書きおろし部分であるが、第3章(教科目「乳児保育I」のテキスト類にみる保育者間の「連携・協働」に関する分析的研究)、第4章(保育者間の「連携・協働」を支えるソーシャル・キャピタルのあり方)については、以下の学術論文に掲載された論文2編をもとに、必要な加除修正を加えながら再構成を行ったものである。

永井久美子(2021) 乳児保育のテキストにみる保育士間の「連携・協働」に関する分析的研究, 大阪総合保育大学紀要, 15, p. 25-38, 単著 【査読あり】

永井久美子(2022) 保育士間の連携・協働に関する研究動向 ―乳児保育における保育士間のコミュニケーションに焦点をあてて―, 大阪総合保育大学紀要, 16, p. 69-78, 単著 【査読あり】

以上のように、本論文は論者の博士後期課程進学後の研究の踏まえたものと認めることができる。

(2)当該博士学位申請論文の属する研究領域において独創性が認められることについて

ここでは、2つの観点から、本研究の独創性について述べる。

1点目は、園内における円滑な連携体制・協働体制を構築するために、どのような園内組織体制が求められるかについて、ソーシャル・キャピタル理論を用いて検討した点で独創性がある。従前より、保育現場のみならず様々な職種の職場で組織内連携が求められているが、多くの場合、コミュニケーション不足やコミュニケーション上の課題としてあげられていることが多い。本研究では、そこに組織論としてソーシャル・キャピタル理論を援用することにより、保育士間のつながり(ネットワーク)に視点をあて、構造的ソーシャル・キャ

ピタル及び認知的ソーシャル・キャピタルの醸成の観点から円滑な連携体制・協働体制の構築を論じたことは独創的である。

2点目は、ソーシャル・キャピタルの醸成においては「人々の協調行動を活発にする」ことが必要であるが、とくに本研究では3歳未満児クラスの保育者間の協調行動にはどのようなものがあるのかということ具体的にインタビューにより明らかにした点は、大変有益である。

このように、本研究で明らかになった知見や提案されている事柄は、円滑な連携体制・協働体制の構築に関わる課題解消に資するもので有益であり、保育実践学や保育現場の組織論の観点において独創性が認められる。

(3) 当該博士学位申請論文の属する研究領域において、その水準の引き上げに資するものであると認められることについて

保育現場の組織論については、従来、保育者集団の同僚性の醸成や組織マネジメントの視点、チーム保育論などの観点から検討されることが多く、それらを研究の知見を踏まえても園内組織における円滑な連携体制・協働体制の構築には、十分に明らかにされていなかった。一方、本研究において、構造的ソーシャル・キャピタル及び認知的ソーシャル・キャピタルの醸成の観点、3歳未満児クラスの保育者間の協調行動を明らかにしたことによって、園内組織における円滑な連携体制・協働体制の構築について新たな地平が生まれたと言える。

そのため、本研究の属する研究領域において、その水準の引き上げに資するものであると認められると考えられる。

(4) 当該博士学位申請論文に、他の領域を含む学際性が認められること

本研究は、3歳未満児クラス並びに保育所・こども園等の園内組織の連携体制・協働体制の構築に関わる研究である。そこへのアプローチとして組織論に関わる研究領域として検討している。またソーシャル・キャピタル理論は社会学に関わる研究領域の概念であることから、保育現場を対象とした組織論と社会学に関わる研究領域をつなぐ学際的な研究と認められる。また、この知見は保育者養成教育並びに現職教育において重要な知見であることから、教育学ともつながる学際的な研究とも言える。

最後に、(5) 本学大学院が授与する博士の学位にふさわしいと認められるものであることについてでは、本論文が提起している視点や考え方は、本学の保育を軸とした保育方法研究・内容研究の土台となる研究であり、本学の博士の学位にふさわしいと認められる。

本論文は、以上のように、評価しうる独創性が認められるが、論者自身が今後の課題としたもののほかに、博士学位請求論文公開審査会において 3 名の審査委員により出された質問や問題点について主なものを記すこととする。

第 1 に、言葉の定義や文章表現がトートロジーに陥っている個所が散見されるため、指摘点を踏まえて修正が求められた。

第 2 に、保育者集団の同僚性の醸成や組織マネジメント視点などの先行研究との関連付けは不十分な箇所が課題として残っているので、指摘点を踏まえて修正が求められた。

第 3 に、5 章で得られた具体的な協調行動はうまくいっているケースを取り上げているので、今後、対象を広げて検討する必要があるのではないか。

第 4 に、文献引用の適切性等にかかわる事項などの再検討が必要である。

以上、論文審査委員により指摘された本論文の主たる問題点を列挙した。これらの指摘に対して課題が残っているが、指摘された課題に対し訂正することを含めて、論者から応答と回答が得られ、修正を行うことが確約された。

このように本論文にこれらの問題点が含まれているのは明らかであるが、本論文によって明らかにされた知見は、本研究の属する領域において課題解消に資することを鑑みて本論文の価値を損なうものではない。

よって、本論文は、博士(教育学)の学位を授与するにふさわしいと認める。